

アンナ・ペグラー・ゴードン先生 講演会



6月13日(土)14時より、ミシガン州立大学(ジェームズ・マディソン校)のアンナ・ペグラー・ゴードン先生の講演会が1号館1階会議室において開催された。今回、ペグラー・ゴードン先生は、日本アメリカ学会とアメリカ歴史家協会(OAH)の2009

年度短期滞在研究者派遣プログラムによって来日され、本学人間文化研究科が受け入れ先となった。講演会は「写真からみるアメリカ合衆国の移民政策 1875-1930年(In Sight of America: Photography and U.S. Immigration Policy, 1875-1930)」と題し、本研究科のアメリカ文化研究会と名古屋アメリカ研究会の主催、人間文化研究所の後援により、研究者だけでなく市民の方々にも理解いただけるように日本語の通訳を交えて行われ、合わせて49名の参加者を迎えた。

講演の内容は、アメリカ合衆国でその年に発表された優れた歴史研究論文を集めたThe Best American History Essays 2008に選ばれた論文を基にし、今年9月に出版される新刊の一部を紹介いただくものだった。気鋭の移民史研究者として注目されるペグラー・ゴードン先生の研究の新しさは、移民史研究の資料と方法に写真を取り入れ、写真による可視化の問題を論じた点である。具体的には、19世紀末アメリカ合衆国において中国系移民が排斥される中、科学的な管理強化に基づき証明写真が導入されたのに対し、一部入国が許可された中国系移民がアメリカの中産階級の規範に適合的な人物像を写真によって造形し抵抗を試みた点を分析することによって、アメリカの移民政策に内包された人種主義と移民の対抗戦略を明らかにした。講演には多くの質問が出され、講演会終了後にはペグラー・ゴードン先生を囲んで懇親会も行われた。

この講演会以外にも、12日(金)午後と13日(土)午前には研究者向けの2つのセミナー、セミナー1“Nativism and Indigenismo: Mexican Immigrants and Mexican Arts in the United States, 1929-1940”とセミ

ナー2“Seeing Immigrants through Ellis Island”、15日(月)5限には学部生向けの特別授業“Mexican Immigration: Past and Present”が開催された。今回の招聘により、多くの研究者だけでなく、本学の大学院生や学部生、市民学びの会を含む市民の方々も最新の移民史研究の成果にふれて、アンナ・ペグラー・ゴードン先生と研究交流を行うことができたのは有意義な機会だったと思われる。

山本明代(同研究科准教授)

● Human & Social サイエンス・カフェ

第23回 サイエンス・カフェ 4月19日(日)

テーマ:「変貌するアメリカの人種観
—文化的視座から考える—」

講師: 新井 透教授

1月20日にオバマ新大統領が就任した。彼は「黒人」と言えるかの問題はあるが、少なくとも有色であるオバマ氏の就任はアメリカの変化を示している。この変化しつつあるアメリカ合衆国にとって切り離せない奴隷制度、プランテーション、宗教、公民権運動の歴史を主として黒人の文学、文化を通して説明され、アメリカは「人種の壁を越えられるか」という問いかけがなされた。

私は社会学者が「文学は『フィクション』で研究対象とはならない」と言うのをよく耳にします。しかし、なぜこの「フィクション」が書かれたか、ジャズはいかに生まれたか、ある作品を誰がどのように批判するか、を考察することは社会を理解する手掛かりに十分なりうると思いました。例えば「風と共に去りぬ」を取り上げられて、白人と黒人の視点では作品の評価が異なることを説明された。このようにみていく面白さを伺い、文学の奥深さを考える好機になりました。また、南部の果実は奇妙な果実をつける・・・で始まる歌「奇妙な果実」が高く評価されたことは、歌の力の大きさを痛感させます。

時間の都合もあり、ネイティブの文化は一部の紹介にとどまりました。次回はマイノリティの文化比較を伺いたいと思いました。

房岡光子(人文社会学部研究員)

第24回 サイエンス・カフェ 5月17日(日)

テーマ：「ホームレスと『住所』『居住』権」

講師：菅原 真准教授

今月のサイエンス・カフェは、「ホームレスとく住居>・く居住>権」と題し、菅原真准教授の講演が行われました。当日は雨が降る悪天候でしたが、10名の方に参加いただき、終始アットホームな雰囲気でした。

講演冒頭、派遣切りやワーキングプアに見る、近時の若者の労働環境問題に触れ、“「絶望」する若者たちに人文社会科学は「希望」を語ることはできるのか？”という問題意識を持ち、路上生活者又はホームレス状態にある人の「人」権・「市民」権である、「住所」や「居住」をめぐる憲法学的考察をするに至った経緯が説明されました。

次に、実際の訴訟内容とその判決を追いながら、法律上及び行政上、ホームレスの「住所」「居住」はどう考えられてきたか、民法上・公法上の「住所」観念はどのようなものか説明がなされた後、「住所」がないことで社会的に不利益になること具体例を挙げ、「住所」「居住」権を考察しました。また、ホームレスが居住している場所は、公園等の公の場所であることから、ホームレスの自立支援法と都市公園法の規定の矛盾を見ながら、ホームレスの「住所」「居住」権と公的空間占有権限の問題についても考察しました。

講演終了後は、質疑応答及び講師・参加者を交えての意見交換を行いました。身近な話題であり、実体験を踏まえた活発な発言がなされました。

昨今の雇用制度や経済状況の変化から、ホームレス自体の実態も従前とは異なってきており、その「住居」「居住」権を考える重要性は増してきていると強く感じるカフェでした。

廣瀬直子（同研究科博士前期課程）

第25回 サイエンス・カフェ 6月24日(日)

テーマ：「子ども虐待を防ぐ」

講師：石川洋明教授

梅雨の中休みの午後、「カフェ・グラシュー」には20名ほどの参加者が集まった。小学校教諭をしている妻から、しばしば「児童虐待」の生々しい実例を聴かされている私にとって、今回のテーマは実に興味深いもの

であった。

「いつから子ども虐待が問題になったか」という、「子どもの虐待」の歴史的経緯の説明から始まった今回の講義は、有名な「メアリー・エレン事件」(1874年・ニューヨーク)の概略説明へと移行し、やがて20世紀後半の「子ども虐待防止ルネッサンス」の話題へと推移した後、主に日本の抱える現状と課題の提示、そして打開策についてのテーゼへと深化した。

今回の「サイエンス・カフェ」における講義も、石川先生の豊富な国内外でのフィールドワーク経験を背景にしたものであり、ある事例や事象に対して先生自身が「実感」した感触と、それに基づいて構築された虐待防止のための理論的裏付けとが、絶妙のバランスを有し確実な説得力を帯びていた。殊に「子ども虐待支援の層構造」についての説明は、明解にして肝要なポイントを押えたものであり、受講生が深く頷く姿が印象的であった。加えて「貧困と子ども虐待」の説明においては、「貧困の閾値」について解説した後、日本の現状を語るという道筋を踏んだせいか、日本の抱える現状が予断を許さないものであることを強く印象付けられる結果となったように感じている。

最後に石川先生の研究方法が、理論社会学の確かな裏付けを基にしたフィールドワークであることを改めて認識させられる講義であったことを付言したい。

太田昌孝（同研究科博士後期課程）

● マンデーサロン

第23回 マンデーサロン 4月20日(月)

テーマ：「貧困の放置は罪なのか

—国境を越える正義の可能性—

講師：伊藤恭彦教授

今年度最初のマンデーサロンが4月20日に開催された。4月に赴任したばかりの伊藤恭彦教授が「貧困の放置は罪なのか—国境を越える正義の可能性」と題して報告して、活発に質疑が行われた。

まず21世紀初頭の世界の貧困問題を数字で示して、国境を超える財移転政策、例えばODA政策の倫理的



根拠の考察が報告の課題とされた。私たちの日常生活に潜む常識としてマルサス主義、リバタリアニズム、ナショナリズムについて検討し、とくにリバタリアンの所有の問題点として5点あげる。そして「常識」から正義へ、国際公共政策の改革を展望する。慈善ではなく、正義に基づく国境を越える財移転政策について、ODA政策や国際連帯税などの新たな政策を紹介する。代わりに、コスモポリタリズムと関わらせて、地球市民としての倫理的課題を提示した。

多面にわたる報告を紹介するのは困難をきわめるが、「貧困の放置は罪なのか」「国境を超える正義の可能性」という問題提起は、32名の参加者の知的好奇心を大いに刺激するものであった。初めての参加者も多く、今年度最初にふさわしいサロンであった。

山田 明（同研究科教授）

第24回 マンデーサロン 5月18日(月)

テーマ：「本願寺の歴史と史料
—本願寺展に寄せて—」

講師：吉田一彦教授



去る5月18日に、吉田一彦教授を講師に迎え、マンデーサロンが開かれた。5月31日までの会期で、名古屋市博物館で開かれている「本願寺展」にちなんで、大変刺激に満ちた内容であった。

すなわち、本展覧会に出品されている史料(滅多に見られないものが多い!)の写真を映しながら、前半では、親鸞の没後、その廟を発展させて創建された本願寺がたどった歴史を、親鸞の血統を引く弟子達の人間関係を軸に確認してゆき、後半では、本願寺ゆかりの文書・絵画などの文化財を取り上げながら、その歴史史料のおよび美術史的価値についてわかりやすく解説された。一時間を超えるお話しの後、参加者から本願寺や真宗に関わる具体的な質問が出され、さらに充実した内容になった。

今回は、名市大と市博物館の種々のレベルでの連

携が始まったことを受け、マンデーサロンのPRを博物館にも依頼したことも功を奏し、過去最高の50名の参加者を得た。今後、研究所と博物館の連携も模索し、研究所の活動を一層充実させてゆきたい。

阪井 芳貴（同研究科教授）

● トーキング・カフェ

6月18日(木)のトーキング・カフェは、本学人間文化研究科在籍の伊藤泰子さんが話題提供者となり、人工内耳を装着する聴覚障がい者の現状についての報告と討論が行われた。

まず人工内耳に関するビデオを視聴、その後松山智著『僕はサイボーグ』からの抜粋を資料として人工内耳について基本的な情報を得た後、装着を推進する医師の葛藤、技術の発達と装着者の本当の利便性、障がい者への視線など、参加者同士の活発な意見が交換された。

予定：7月9日(木) 16:20～

「留学生から見た名古屋」のテーマで開催します。

重原 惇子（本研究所特別研究員）

● 第13回「全国小さくても輝く自治体フォーラム」に参加して

5月27～28日に三重県朝日町で上記フォーラムが開催され参加した。27日は加茂利男立命館大学教授の「これからの地方制度を考える」という記念講演、分科会・町村長交流会などが行われた。加茂教授は「平成の大合併」を振り返る中で、第29次地方制度調査会答申や道州制、制度改革の選択肢として北中欧・南欧の動きなどに言及した。

筆者は町村長交流会に招かれ、緊張しながら広域連携のあり方について質問・コメントした。長野県泰阜村の松島村長や岐阜県白川村の谷口村長などと交流でき有意義

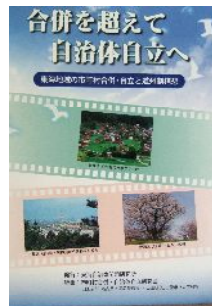
であった。28日のシンポジウム「地方制度再編と小規模自治体の課



題」は、3人の町村長の発言がじつに興味深かった。写真右から長野県阿智村の岡庭村長、宮崎県綾町の前田町長、そして地元朝日町の田代町長である。まさに「小さくても輝く自治体フォーラム」にふさわしいシンポジウムであった。

5月16日の地方制度調査会答申により、市町村合併は来年3月末をもって「一区切り」とされた。道州制導入とあわせて合併推進を「再起動」させる可能性もあり、今後の動向を注視せねばならない。

フォーラムに間に合わせようと、写真のような『合併を超えて自治体自立へ—東海地域の市町村合併・自立と道州制構想』という冊子を準備してきた。冒頭に、地域力を活かして子育て環境の整備・自立のまちづくりを進めてきた朝日町の田代町長へのインタビューが掲載してある。フォーラムでもタイムリーな出版と好評であり、一読していただけると幸いである。



山田 明（同研究科教授）

● 「市民学びの会」からの報告

2008年4月26日(日)第三回総会を開催しました。
記念公演：「学ぶ楽しみ、市民活動、時々哲学」
講師：小川仁志氏

学ぶ楽しみとは（小川仁志氏ブログより）

名古屋市立大学で講演をしました。「市民学びの会」という、大学と市民の間に立って学びの機会をコーディネートする団体が主催したものです。

演題は「学ぶ楽しみ、市民活動、時々哲学」。とくに会の趣旨に鑑みて、学ぶ楽しみを中心に話をしました。私が考える「学び」とは、単に知るだけでなく、考え、表現し、分かち合うという四つのプロセスをすべて含みます。

そして、これらすべてを実現するのに一番適している場が大学なのです。決して大学生や大学院生になるべきだと主張しているのではありません。大学をインフラとして活用しようということです。

その意味で、「市民学びの会」のような大学活用をコーディネートしてくれる団体があるのは素晴らしいこ

とです。一般市民にとって大学は別世界ですから。図書館や公開講座など、どんどん活用して、大学を開かれた学びの場にしましょう！

● 2009 研究プロジェクト

- ・研究代表者：土屋勝彦教授
 「世界文学における混成的表現形式の研究—移民文学を中心に」
- ・研究代表者：石川洋明教授
 「18歳のハロー・ファミリー」
- ・研究代表者：有賀克明教授
 「地域に根ざす次世代育成支援としての（学—学—社連携）の試み」
- ・研究代表者：山田明教授
 「名古屋の『観光まちづくり』に関する人文社会科学分野からの学際的研究」
- ・研究代表者：平田雅己准教授
 「平和博物館の社会的機能に関する基礎的研究—『ピースあいち』を实践の場として」

◇ 今後の研究所主催行事の予定

● Human & Social サイエンス・カフェ

- 7月19日 土屋勝彦教授 「越境する文学」
- 8月16日 山田明教授 「COP10と名古屋の観光まちづくり」

◇ 学会・研究会などのお知らせ

● ドイツ現代文化研究会

日時：7月26日(日曜)午後4時から6時まで
 場所：国際文化学科会議室(515号室)
 講演者：ユーディット・ブラントナー
 (本学客員教授、オーストリア・ジャーナリスト)

題目：オーストリアにおける過去の克服
 言語：ドイツ語(ただし質疑応答は日本語も可能)

● 日本独文学会秋季研究発表会(全国大会)

日時：10月17, 18日(土曜、日曜)
 会場：メイン会場：教養教育棟(2号館)
 サブ会場：人文社会学部棟(1号館)

詳細は土屋勝彦教授まで

● 2009 年度東海社会学会シンポジウム

テーマ：東海社会の「地域力」を問い直す
 日時：7月12日(日)13時45分～
 会場：椋山女学園大学星が丘キャンパス